

舞踊における「プリ(解く)」の形象化—舞踊を中心とした日本の「神楽」と韓国の「クッ」の比較を通して—

氏名	金 悦 希		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲博制第 50 号		
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当(課程博士)		
学位論文題目	舞踊における「プリ(解く)」の形象化 —舞踊を中心とした日本の「神楽」と韓国の「クッ」の比較を通して—		
作品テーマ	夜しか飛べない鳥(詩人 許蘭雪軒の恨とプリ)		
論文題目	舞踊における「プリ(解く)」の形象化 —舞踊を中心とした日本の「神楽」と韓国の「クッ」の比較を通して—		
論文審査委員	主査 教授	浜 畑 賢 吉	
	副査 名誉教授	田 中 敏 雄	
	副査 教授	堀 内 充	

内容の要旨

本論文は韓国の伝統祭儀である「クッ」の神事に見られる「プリ」の諸相の形象化について論じたものである。申請者は永く韓国で伝統舞踊を学び、また公演も行っていった。しかし、韓国伝統舞踊に対して疑問を感じて、古くから文化的に繋がり深い隣国の日本に渡った。そこで日本の祭りを目の当たりにして、日本の祭りにも韓国の伝統祭儀に見られる「プリ」的なものがあると考えた。韓国の伝統祭儀の研究については資料が少なく、その伝承は口承であるため理解しがたい。そこで、日本の祭りの神事を体験したり研究することによって韓国伝統舞踊に見られる「プリ」が理解できるのではと考え、「神楽」における巫女舞や神輿渡御や「直会」等の日本の祭りの神事について体験と研究をおこなった。韓国伝統舞踊に見られる「プリ」の形象化を明らかにするために申請者は(1)日本の文献資料に基づく考証(2)現地調査による「クッ」の祭儀の検

証(3)日本の「神楽」と韓国の「クッ」の巫女舞の実技教習による実証の3つの方法を用いて論じる。

その研究の論文の構成として、第一章で韓国の伝統祭儀である「クッ」に見られる“「プリ」とは何か”を明らかにする。「プリ」という韓国の言葉を韓国と日本の文献資料を用いてその意味内容について論ずる。即ち、「プリ」は日本語では「解く」や「解放」と言葉に訳せる。また、「クッ」の祭儀は歴史的には初めは自然神への畏怖と感謝の呪術であったが、時代が進むにつれ、人々のための希望や願望の呪術に変容していった。そして、韓国の民族の心の中にある「恨」即ち、社会制度から生じる身分や男女の差別から生じるしがらみや悲しみ、また、個々の人々の悩みや苦しみ等を「プリ」(解く)するのに「クッ」の祭儀が行われることを考証する。

次に、朝鮮半島の南の慶尚南道の統榮で行われた「南海岸別神クッ」という伝統的な「クッ」の祭儀について現地調査して具体的に「プリ」の形象化がどのように行われたかを検証する。この地は古代の伽耶国であり、日本では任那と称され日本の統治機関があった。今回調査した「南海岸別神クッ」は海難事故で亡くなった人達の霊を慰める「クッ」である。この「クッ」そのものが広義の「プリ」と解釈できるが、祭儀の進行の中で、白い布の結び目を解く所作や祭主の胸を撫でながらの託宣、形代(亡霊)を洗い上げる、巫女が鈴、剣、小竹葉をもって舞う等が「プリ」の形象化であることを検証する。さらに、祭儀の最後に行われる「ティプリ」と言う神と共に飲食し、歌舞音曲で神と共に遊ぶのも「プリ」の形象化であると論じる。

第二章では初めに日本の祭りの神事である「神楽」について多くの文献資料を用いて神楽の成立とその意味について考察する。日本の祭りの神事には朝鮮半島からの影響で受け継がれたものがあることを考証し、日本における踊りの原点とも言われている「神楽」の起源について『古事記』等の歴史書や民俗学の文献資料等によって考察する。そして、「神楽」で行う鎮魂(タマフリ)は生命力の活性と悪霊の鎮圧を目的とするとし、三品彰英氏の朝鮮語の原義による日本の「タマフリ」の祭儀の「フリ」と朝鮮の巫覡がおこなう「プリ」とが基本を同じくするのではないかと言う説を援用して日本の「神楽」における鎮魂(タマフリ)と韓国の「クッ」における「プリ」との共通性を指摘している。その共通性は言語だけでなく、「タマフリ」は生命力の活性と悪霊の鎮圧であり、「プリ」はしがらみや苦しみから人々を解き放ち、再生、活性化することで

舞踊における「プリ(解く)」の形象化—舞踊を中心とした日本の「神楽」と韓国の「クッ」の比較を通して—

あり、意味内容においても共通性があることを論じている。さらに、祭儀の最後の神事である神との共飲共食である韓国の「クッ」における「ティプリ」と日本の祭りにおける「直会」とに類似性があることも考証する。

次に、前節の日本の「タマフリ」と韓国の「プリ」の共通性を踏まえて、申請者が実技実習を受けた日本の「浪速神楽」の“剣の舞”と韓国の「南海岸別神クッ」の“シンカルチュム”(神剣の舞)との比較による様々な形象化された所作の相違点とその所作の意味内容について実証する。その所作は(1)拝礼、(2)足の踏み方、(3)旋回、(4)四方祓い、(5)身体力の加減、(6)手の動き、(7)その他である。そして、それぞれの所作に神の怒りや人々の苦しみや悲しみを「プリ」(解く)する意味内容があることを明らかにする。

第三章は創作舞踊「夜にしか飛べない鳥(詩人、許蘭雪軒の恨とプリ)」である。この創作舞踊では許蘭雪軒の詩の世界を通して、彼女を取り巻く過酷な人生を舞踊化することを試みた。そして、許蘭雪軒が詩作することによって「恨」を「プリ」(解く)していく様子を論文で考証してきた形象化された「プリ」の諸相を取り入れて表現した。以上が申請者の論文の構成と論旨である。

(39 図、38 頁、26,311 字)

審査結果の報告

本論文は韓国の伝統祭儀である「クッ」の神事に見られる「プリ」の諸相の形象化について論じたものである。申請者は永く韓国で伝統舞踊を学び、また公演も行っていった。しかし、韓国伝統舞踊に対して疑問を感じて、古くから文化的に繋がり深い隣国の日本に渡った。そこで日本の祭りを目の当たりにして、日本の祭りにも韓国の伝統祭儀に見られる「プリ」的なものがあると考えた。韓国の伝統祭儀の研究については資料が少なく、その伝承は口承であるため理解したい。そこで、日本の祭りの神事を体験したり研究することによって韓国伝統舞踊に見られる「プリ」が理解できるのではと考え、「神楽」における巫女舞や神輿渡御や「直会」等の日本の祭りの神事について体験と研究をおこなった。韓国伝統舞踊に見られる「プリ」の形象化を明らかにするために申請者は(1)日本の文献資料に基づく考証(2)現地調査による「クッ」の祭儀の検証(3)日本の「神楽」と韓国の「クッ」の巫女舞の実技教習による実証の3つの方法を用いて論

じている。

これについて副査田中敏雄教授は、

(1)「プリ」の形象化を考察するにあたり、同じ論旨が執拗なまでに述べられて論が煩雑になってしまっている箇所がある。それは文献による考証と調査による検証と実技による実証での論旨が同じであった結果である。そのことは論文の論旨には齟齬をきたしていない。

(2)本論文は文献による考証と調査による検証と実技による実証によって構成されている。それによって煩雑もあるが、「プリ」の形象化を多方面から明らかにすることが可能になった。この3つの手法で論文を構成する申請者の研究努力は評価に値する。

(3)民俗学の用語について慎重さが必要である。しかし、民俗学の多くの文献を渉猟して日本と韓国の祭儀や「プリ」について論を展開していることについては評価される。

(4)論文に表層的な内容になっている部分もあるが、深く掘り下げて行くと論が煩雑になった論旨の明確さがなくなることもあり、論文の価値大きく損なうものでもない。

(5)創作舞踊の「夜しか飛べない鳥」は申請者が論文で研究した「プリ」の形象を創作舞踊で表現しようとした作品である。作品の中で形象化された「プリ」が形となって多く取り入れられ、舞踊が説明的になっているのかと思いましたが、作品ではそれを感じさせない舞踊の流れがあり、すっきりとした好感の持てる作品でした。

と、いくつかの問題点を指摘するも、本論文は博士(芸術)論文に値するものと認め、これは主査としても異論はない。

ところで創作舞踊の「夜しか飛べない鳥」—詩人許欄雪軒(ホナンソルホンの恨とプリ)は許欄雪軒を自己と他者の両面から描き、その詩の世界を通して、彼女を取り巻く過酷な人生を舞踊化することを試み、許欄雪軒が詩作することによって「恨」を「プリ」(解く)していく様子を、論文で考証してきた形象化された「プリ」の諸相を取り入れて表現しようというものである。

当初は、田中副査の危惧した通り、論文の研究成果を作品に取り込もうとするあまり、作品が

舞踊における「プリ(解く)」の形象化—舞踊を中心とした日本の「神楽」と韓国の「クッ」の比較を通して—

説明過剰になっていたのでは、そこを徹底して削っていくという作業を促した結果、副査堀内充教授が指摘するように「一貫してシンプルな手法で綴られ、構成もどちらかというと簡素で手が練られているものではない。しかしながら決して浅はかなものではなく、抒情詩的な深みがあった。これは許欄雪軒(ホナンソルホン)が詩人である姿を想起させる力にも感じられる」作品となった。さらに堀内副査は「何よりも楚姫を演じたキムミンジの舞踊表現が美しく素晴らしい。彼女が舞踊家として持つ実力というよりも、申請者である作者の提示する本作品の主人公が担う主題を見据え、見事にその創作意図に応えた表現力であった。本作は舞踊創作のなかで、申請者の創作力だけでなくキムミンジの舞踊表現を引き出した演出力も高く評価すべきで、合格としたい。」とし、これは主査の見解とも一致する。

以上のように、論文に書かれた論理を形象化するのに手間取ったが、最終的に余計な説明を省き、芸術的な舞踊作品に仕上げる事が出来た。よって本論文を大阪芸術大学大学院芸術制作研究分野の学位(博士)申請論文に価するものとして認定する。